

ペルセポリス

高校生のころ世界史で学んだ懐かしい古代ペルシャ帝国の古代都市であり、マケドニアのアレクサンドロス大王が紀元前 331 年に東方遠征の途上壊滅させた歴史に残る廃墟である。

その地名のいわれも一風変わっている。ペルシャ語ではなく、「ペルシャの都」と「都市を破壊する」というギリシャ語をもじって付けられたもので、その名の起源は定かではないが、考えてみればズバリ名は体を表わしていると言えよう。

その広大な宮殿群の廃墟は、今もって区画がしっかり整備され、壁が石造りで固定され、高い柱頭も巧みに組み合わされ、周囲に敷設された豪華な小宮殿と併せて、往時の勢力と権威はさぞかしと思わせる壮大さと威厳を感じさせてくれる大宮殿跡である。

そもそもはアケメネス王朝ダレイオス一世が紀元前6世紀に建設した宮殿群だった。広漠たる砂漠の中に行政府を設けたが、その実務はここではあまり行われなかった。現存する広大な敷地に建つ当時の宮殿は、後年になって主に儀式用に使用されるようになったが、ペルシャ歴代の王がこれらの宮殿に住む機会はほとんどなかった。王は季節感の漂う住環境に恵まれたバビロンを含む他の3つの都市に季節ごとに移り住んでいた。ペルセポリスでは王は新年の祭事を行い、諸民族から貢納を受け、王権が神から与えられたことを確認する聖域であったと言われている。そのため東方遠征へ向かったアレクサンドロス大王はこの地を徹底的に破壊し、財宝を略奪してからインダス沿岸の街・タキシラへ向かった。

首都テヘランから直線にして南方約 600 km の広大な平野の真っ只中に、今は広い宮殿群の遺跡だけが残されている。灼熱の砂漠の中に建てられた人工的な宮殿群の遺跡周辺には、歴史のロマンや、在りし日の庶民の生活臭を感じさせるようなものはなく、生活のにおいも残滓もない。

そんな暑い中で遥かアテネからサイクリングでやって来たひとりの青年に会った。古代オリエント史を学ぶギリシャ人の彼にとって、ペルセポリスは憧れの地であり、ここを訪れることが自分の青春の夢を確認する行動だと言った。

紺碧の空を見晴らす乾いた大地はまったく人気(ひとけ)を感じさせず、周囲には僅かばかりの樹木のほかには何の息吹も感じられない。古代の「有」は現代の「無」となり、まさに「無」の極地となった。灼熱地獄の中でその広大な宮殿跡で静かに目を閉じていると、古代のロマンに誘われ馬上のアレクサンドロス大王が目の前を通り過ぎていく幻影を見ているような不思議な気分させられる。